

# 2022年度 箕面市行政視察報告書

## 1 日程

2023年 2月 1日(水)～ 2月 2日(木)

## 2 視察先

### (1) 広島県尾道市（尾道市役所）

視察項目	地域包括ケアシステム体制の実践と今後の課題について
視察目的	先進市である尾道市の地域包括ケアシステムの体制づくりや実施状況及び課題等を学び、箕面市の施策やまちづくりに活かす。

### (2) 広島県福山市（鞆の浦歴史民俗資料館）

視察項目	資料館設置の経緯や歴史資料の保全、鞆の浦について
視察目的	鞆の浦の歴史資料館設置の経緯や資料収集活動、市民参加による景観保全などについて学び、施策に活かす。

### (3) 広島県三原市（三原市役所）

視察項目	中学生「海外研修・交流事業」及び「少年少女オンライン交流会事業」について
視察目的	各事業の取組み状況や目的、成果、課題を学び、当市における海外研修・交流事業復活の議論について研鑽に努める。

### (4) 参加者

議員	日本共産党：神田隆夫、村川真実、名手宏樹 市民派クラブ：増田京子、中西智子
----	--

## 尾道市 地域包括ケアシステム体制について

項目	内容	備考
尾道市の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口 131,170 人（2020 年度）</li> <li>・広島県の東南部に位置し、瀬戸内海に点在する島々からなる。海上交通および 3 つの自動車道が交差する物流・文化交流の拠点（瀬戸内の十字路）としての役割を担う</li> </ul>	尾道市役所福祉保健部 高齢福祉室課長、 同高齢者福祉係長
地域包括ケアシステムについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢化率は全国平均より高い（36・84%）が、第 6 期～第 8 期の基本理念に「幸齢（こうれい）社会おのみち」を掲げ進めてきた</li> <li>・双方向の課題共有ネットワーク</li> <li>・公立みつぎ総合病院中心の「みつぎモデル」</li> <li>・地域包括ケアセンターは 7 圏域、11 名体制という充実ぶり</li> </ul>	同上
地域ケア会議について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尾道市自立支援型地域ケア会議は 3 種ある（個別ケース、地域課題解決、自立支援・介護予防）</li> <li>・多職種連携、地域課題の発掘・資源開発、政策形成につなげる</li> <li>・専門職の支援体制の整備、歩いて行ける通いの場づくりが課題</li> </ul>	同上
自立支援型地域ケアマネジメントについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「尾道式」個別の自立支援メニュー（要支援 1・要支援 2 で状態改善が見込まれる者が対象）（「自立」を「卒業」という位置づけにはしていない）</li> </ul>	同上
在宅医療・訪問診療	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「尾道市在宅医療・介護連携ガイドブック」はイラストを多用し、文字も大きく、分かりやすく編集されている</li> <li>・総合病院における退院にむけたカンファレンスに、医療職とともにケアマネも参加し、介護保険の申請や住宅改修の手配など、退院後の在宅療養の準備が整う多職種連携体制。</li> <li>・三医師会の連携、在宅かかりつけ医を中心とした「尾道方式」</li> </ul>	同上

<p>高齢者が安心して暮らせる環境づくり、ACPについて</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分ノート」、「ACP普及推進員」</li> <li>・8050世帯・ひきこもり、ヤングケアラーなどが課題である</li> <li>・例えば「ゴミ屋敷」住民への支援など個別・困難事例の解決に向けて、全庁・関係機関との横の連携を重視した支援体制</li> <li>・地域で生きがい・社会参加の「共生社会」</li> </ul>	<p>同上</p>
----------------------------------	---	-----------



所感／1970年代に構築された、公立みつぎ病院を中心とした地域包括ケアシステム「みつぎモデル」は訪問介護・訪問看護・リハビリ等在宅ケアの充実で寝たきりゼロに取り組むなか、尾道医師会・在宅かかりつけ医が中心となった医療介護・多職種連携等、地域の特性に応じた取組みは流石といわざるを得ない。しかし、尾道市においても超高齢社会のなかで高齢者を取りまく課題が多様化・複雑化し、人材不足は大きな課題となっている。

箕面市では公立病院の運営が民営化されようとしているが、今後ますます医療・介護・保健・福祉が一体的に提供されねばならない時代において、あらためて「地域包括ケアシステム」体制の重要性と深化の必要性を考えさせられた。

(市民派クラブ 中西智子)

## 視察先名称 福山市鞆の浦

項目	内容	備考
福山市 鞆の浦の特徴	<p>鞆の浦は、潮まちの港と言われ、満潮時に瀬戸内海の東西から潮の流れが流れ込み、干潮時には東西に流れ出る、という自然現象を活かし、船の寄港地として古くから栄えた港。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人口は 1983 年当時：約 9,000 人</li> <li>2008 年 約 5,000 人</li> <li>2022 年 約 3,500 人</li> </ul>	鞆の浦歴史民俗資料館館長説明
鞆の浦の歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・潮の流れにより古くから文人たちも訪れ、万葉集にも読まれており、古寺も多い。</li> <li>・中世は足利尊氏・義昭も訪れ、軍事拠点となっていた。</li> <li>・江戸時代などは全国からの廻船(商船)が寄港し、商業が盛んで活気のある港であった。</li> <li>・朝鮮通信使や頼山陽なども訪れ、風景を絶賛。</li> <li>・江戸時代初期より醸造された薬味酒「保命酒」は現在も醸造・販売されている。</li> <li>・1977 年から元学校の教師など地元の人たちによる調査・収集活動により 5,000 点程の資料が集まり、鞆の浦歴史民俗資料館建設となる。</li> <li>・人口減により空き家の古民家が増えホテル、宿泊所となっている。</li> <li>・旅行客の形態も変わってきた。バス貸し切りの多人数から少人数となってきている。</li> </ul>	同上
鞆の浦の開発・景観保全	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然の潮流を活かした歴史ある港に、狭い生活道路の代替手段として、1983 年港の両岸埋めたと架橋等の整備計画案が県より示される。</li> <li>・その後、縮小された案となったが、景観保全を訴える住民などが 2007 年埋め立て免許差し止めを広島地裁に提出。</li> <li>・2009 年国土交通大臣が、認可について「国民の合意や反対派との対話が必要」と表明。それを受けて広島地裁は原告の「景観利益」を認め免許差し止め命令を出す。</li> <li>・2011 年 計画は白紙となる</li> <li>・その後、検討が進み、埋め立て架橋案ではなく、山側にトンネルを掘削する案で合意。</li> </ul>	同上

- ・2022年12月トンネル掘削工事着手。
- ・トンネル名称は、鞆の浦学園の児童・生徒の応募作品から選考し「鞆未来トンネル」となった。



所感) 歴史ある鞆の浦ですが、1983年頃から、生活の利便性や地域活性化のために、と海を埋め立て架橋を設置する等の計画案が県から提示され、幾度もの議論や住民などの訴訟を含む反対運動があり、保全されることとなった「鞆の浦歴史的景観」が、現在どのようになっているのかを知りたい、と今回の視察先としました。

歴史的景観保全運動については、裁判闘争だけでなく、国内外からも注目を集めた運動でした。その結果、県が港の埋め立てと架橋事業案を取り下げ、生活の利便性も配慮し、山側にトンネルを設置することで決着がつかしました。そのトンネル工事がちょうど昨年(2022年)12月から始まっており、その現場も見ることができました。国も県も、また福山市なども大きな決断だったと思われまます。

視察をして、潮まちの港の特異性、そして歴史的景観を含む史跡文化財保全などが現在もしっかり進められていることを見る事ができました。人口が減少する中、今後もこの現状を活かし、観光行政がどう進むのか注目していきたい地域です。特に今回は短い滞在だったため、お寺などを見ることができなかつたのですが、滞在型として静かでゆっくりとした観光ができる「まちなみ」だと感じました。箕面も国指定の名勝箕面山を含め、歴史的遺産とそれに育まれた自然環境が多々あります。それらを活かしたまちづくりの参考にしていきたいと思いました。  
(市民派クラブ 増田京子)

# 広島県三原市

項目	内容	備考
三原市の特徴	<p>「浮城」の異名を持つ三原城の城下町を起源とする市で、備後都市圏の中心都市のひとつ。山陽新幹線・山陽本線・呉線・山陽自動車道など主要交通が整っており、広島県における交通の要衝である。2005年3月に新設合併し、三原市となる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人口は8万7402人</li> </ul>	三原市教育委員会生涯学習課長兼中央公民館長、生涯学習課企画振興係長説明
三原市の海外研修・交流事業について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1996年の市制60周年を契機に、子どもたちを対象に国際化時代に対応する資質の要請と、国際感覚の情勢を図ることを目的として、海外交流事業を開始。2001年からは、訪日交流も開始。</li> <li>・2023年1月現在、シンガポールは感染症危険情報レベル1（十分注意）に該当し、ワクチン接種完了済みの場合、入国許可申請、コロナの検査、隔離を受けることなく入国が可能。事業の実施にあたっては、例年、4月に本事業の実行委員会の会議を開催し、当該年度の事業内容を決定することから、2023年度についても、渡航の可否を踏まえた事業実施は、実行委員会の会議に諮りたいと考えている。</li> <li>・海外渡航となることから、参加人数を限定せざるを得ないが、市の長期総合計画の基本目標に掲げる「地域の文化と多様な人材を育むまち」作りの担い手として、本事業じゃ継続していく必要があると考える。また、訪日交流時にベティ中学校訪問団と市内中学校生徒との交流機会を設けることで、参加生徒以外の市内中学生が広く海外に目を向ける機運の醸成を図ることができると考える。</li> </ul>	同上

<p>少年少女オンライン交流会（2021年から）</p>	<p>・市内の中学生がオンラインでシンガポールの多様で異なる文化・生活・習慣などに触れたことにより、参加生徒の異文化理解を深め、英語教育への関心の向上など、国際感覚の育成を図ることができた。事後に行った参加生徒アンケートでも、「海外の人と交流したことで自分の視野が広がった」、「英語をより身近に感じ、英語をよく勉強するようになった」等の声が聞かれた。</p> <p>・学校教育ではなく、社会教区で行っている事業のため、学校単位ではなく、市内の中学生から参加生徒を募集する方法としている。また、プレゼンやグループに分けて、フリートークを行う際の管理の都合上、参加生徒は20名までが望ましいと考える。2021年度は12名、2022年度は17名の応募があった。</p>	<p>同上</p>
------------------------------	---	-----------



所感) 箕面市でも復活を求める要望が出ている、海外渡航を伴う交流事業のあり方について、コロナ禍での取組や、これからの動きについて、大変参考になる視察となりました。

三原市、三原市教育委員会に加え、三原観光協会、三原青年会議所、三原商工会議所、山中学園が組織する少年少女海外研修・交流実行員会が組織されており、箕面市でもまた復活の議論となる際には、様々な協賛を呼びかける動きも必要かと参考になった（三原市でも金銭的な援助は今はなく、市費負担と参加者の負担で渡航費を捻出しているとお伺いした）

姉妹都市というわけではなく、公益財団法人ひろしま産業振興機構の協力で、シンガポールの中学校と個別に三原市として繋がって、交流が行われている。

学校教育ではなく社会教育で行っていることが、箕面市との違いのように感じたが、だからこそその取組とも感じられた。GIGA スクール構想で一人1台のタブレット配布ができており、学校教育にも拡大していきたいとおっしゃっていた。箕面市でも、多くのALTをもっと活用して、展開できる環境だと再確認した。

（ 日本共産党 村川真実 ）